

幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞の手立て

戸潤 幸夫

Means of the Appreciation to Link the Creativity of the Infant to the High Molding Expression

Yukio TOMA

キーワード：幼児の造形表現 鑑賞活動 教材開発

Key Word : Art Expression of the Infant Art viewing Development of the teaching materials

I はじめに

造形表現活動に結びつける鑑賞活動は、あまり日本の保育現場では実践されてこなかった。それは、保育者自身が専門的な美術に関わる知識・技能の獲得をする機会にやや恵まれなかったことと日々の園活動の多忙さのため造形表現活動だけに教材研究の時間を多く注ぐ余裕がないことが理由にあげられる。

全国の各美術館が普及目的で行う、いわゆる美術館教育においても、幼児対象の鑑賞活動を展開しているのは大原美術館や富山県立美術館等わずかと言える。しかし、この美術館での鑑賞活動は純粋に作品鑑賞が目的であり、表現に展開するものではない。

最近注目されている全国のチャイルドミュージアム（子ども美術館）では、幼児から小中学生を対象にアーティストによるワークショップが開催されている。このワークショップの内容は、アーティストの本物の作品に触れ、子ども達はその感動から創造力がかきたてられ、意欲的に制作活動を行うものである。筆者が新潟人間生活学会学会誌「人間生活学研究2号」に紹介した浜田市世界こども美術館の活動がその一つである。しかし、幼児対象と限定すればほとんど実践されていないのが現実である。

芸術を通して保育をしているイタリア・レッジョエミリア市では、各乳幼児施設において芸術専門教師（アトリエリスタ）が中心となり、芸術作品を分析し子ども達の遊びの中で、感性

を育み創造性を広げるため、どのようにアーティストの表現の中から、体験させたい造形要素を抽出しプログラムに取り入れるか検討し実践している。

平成23年に原宿ワタリウム美術館で開催された「驚くべき学びの世界」レッジョエミリアの幼児教育展では、活動の様子を撮影したDVDと子ども達が制作した作品が紹介された。

その展示内容は、レッジョエミリア市の子ども達の主体的学びの様子と一人ひとりが創造力を働かせながらイメージを深化し、表現として具現化していく過程がこの展覧会の鑑賞者に伝わるものであった。

レッジョエミリア市の乳幼児施設は、徹底した少人数制と、ゆったりしたカリキュラムの中、子ども達の主体的活動を誘発する環境構成を十分にできるような体制が整っていることも子どもの学びに結びついていることが伺えた。

日本の保育現場で、まったく同様な実践を行うことは物理的に不可能と言える。しかし、レッジョエミリア市の乳幼児施設での実践は、可能な限り子ども達の造形表現に対する興味をもたせたり、楽しく活動したり、創造力を高めるための手立てとしての環境構成や教育プログラムを考える上で多くの示唆を与えるものである。

本研究は、日本の保育現場の実態を踏まえ、幼児の造形表現力の育ちを考慮し、どのような鑑賞教材を活用し、造形表現活動に繋がる鑑賞方法とはどのようなものかを明らかにすること

が目的である。また、子ども達が五感を働かせ、感じたことから創造力を発揮し、自分の考えや思いが豊かに造形表現できることをめざしたい。

Ⅱ 幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞の手立ての基本的考え

幼稚園・保育園の表現（造形）活動において、造形表現活動に結びつく鑑賞の手立て、つまり鑑賞作品選考とその鑑賞方法を次の1～4の基本的考え方をふまえ教材開発することとした。

1 幼児の表現の特徴について

幼児の表現の特徴は、次のようなものである。

- (1) 子どもの生活を表現する。
- (2) 子どもは知っていることを表現する。
- (3) 子どもの世界の創造そのものである。
(子どもの自由な創造活動)
- (4) 子どもの心の表現である。

つまり、幼児の表現は生の感情を表出する。人間が本能的に行う睡眠や食事・排便のように描きたいから描く、つくりたいからつくるという行為をする。また、大人のようにカメラアイのような見たとおりに表現するのではなく、自分の興味関心や感動の大きさに従って表現する。鑑賞作品や造形表現活動を取り上げる基準は、上記で示した幼児の表現の特徴を生かせるものとする。

2 幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞作品について

子どもの表現に類似していると言われる、原始美術や素朴な図案が美しい民族工芸品、直感的でシンプルな表現をしている現代作家の抽象作品などから選出し、特に美術館で開催される子どものための美術展に多く展示されているものの中から幼児の表現に結びつくと思われる作品を選択する。

鑑賞作品を見ることにより五感が刺激され、イメージが拡充され、鑑賞作品のコピー的量産にならない一人ひとりの個性的表現を可能となるものを選ぶ。

3 鑑賞の方法について

アメリカの美術鑑賞教育運動の一つであるゲ

ティー財団の美術教育者や美術館教育スタッフが編纂したDBAE (Discipline Based Art Education) では、鑑賞過程4段階としてはじめに総合的に全体の印象を感じ取る観察段階、表現されているものを部分的に鑑賞する分析段階、作者の意図を読み取る解釈段階、作品の良さに気づき、自分の表現の糸口を見つける価値判断段階と深めていくことを提唱している。幼児の鑑賞においても、保育者の発問を工夫することで上記の鑑賞段階をふまえて鑑賞させることは可能であり、造形表現活動に結びつけることにより幼児の創造性を高めることができると考える。

4 過去の実践から

筆者が先行研究として、県立新潟女子短期大学附属幼稚園（現新潟県立幼稚園）で実践した鑑賞活動から造形活動に展開した内容については、全国大学美術造形教育教員養成協議会の学会誌「大学造形美術教育研究6号」と新潟人間生活学会の学会誌「人間生活学研究1号」に掲載した。その中から、事例1・2について、鑑賞活動から造形活動に展開した内容を紹介し、幼児でも可能であることを述べたい。

(1) 実践事例1



写真1 アンリー・ルソー作「夢」

幼稚園5歳児が写真1のアンリー・ルソーが描いた「夢」を鑑賞した後、「動物と人が楽しく生活する楽園を描こう!」をテーマに造形表現活動をした。

鑑賞作品を選んだ理由は、ルソーのプリミティブな表現方法が子どもが日頃目になっている絵本の絵に類似しているため子どもにとって親しみやすいと考えるからである。また、描かれているものが子どもにも理解しやすく興味をひ

く動物、食物、人物等であることである。



写真2 鑑賞している様子

鑑賞の方法は、子ども達が紙芝居を見るように保育者の問いかけに応えながらそれぞれのイメージを広げるように展開した。

「この絵はアンリー・ルソーという画家が描いたのだよ！」

「この絵を見てどのように思うかな」
「楽しそう！」「なんか不思議！」

「絵の中に何が描かれているかな？」
「裸の女の人」「笛を吹いている人」「ライオン」
「お猿さん」「鳥」「見たことのない大きなお花」
「へび」「黄色いオレンジ」等

「ライオンやへびと一諸に人もいるけど危なくないのかな？」
「きっと仲良しなんだよ！」

「ところで動物や大きな草や花が生えているところはどこかな？」
「ジャングル」「アフリカの山奥」等

「今日はこんな動物と人と植物と一緒に楽しく生活できる楽園をみんなで描いてもらいたいんだ」

「ふしぎな花や動物描けるかな？」
「たぶん描けると思う！」

はじめに、天地がわかるように山の稜線、太陽、川や人など必要最小限のかたちを画面に描いた大きな紙を準備した。子ども達は、画面の好きな場所に座り、黒色油性マジックで自分のイメージで描き始める。そして、徐々にまわり

の人たちの絵の様子に合わせながら一枚の絵としての調和を考えながら進めていることが伺えた。

下絵が完成し、パステルで着色しティッシュで擦ると柔らかな色彩になることを喜びながら夢中に制作していた。

子どもは人と動物、人と植物の区別をせずに愛する。そんな心をさらに大切に育むのがこの活動の大きな目的である。人と動物、植物が楽しく一緒に暮らしている楽園を園児の思い思いに想像したことを描きながら、友達と協力し大きな作品を作り上げることができた。



写真3 制作の様子



写真4 パステルで彩色している様子

(2) 実践事例2

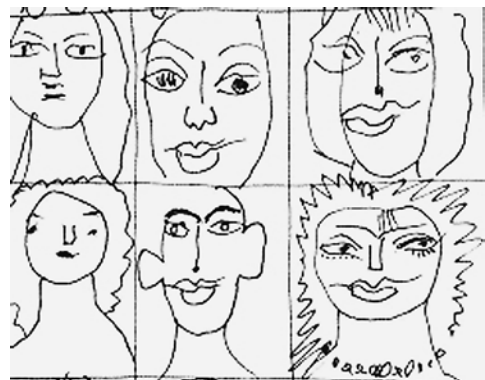


写真5 猪熊弦一郎作「顔の習作（部分）」

幼稚園4歳児が写真5の猪熊弦一郎が描いた「顔の習作」を鑑賞した後、「みんなでえがいた顔が、大きな1枚の絵になった！」をテーマに造形表現活動をした。

鑑賞作品を選んだ理由は、子どもの絵画表現の成長段階に適しているからである。子どもの絵は、2歳半位までのスクリブル（なぐり描き）の時期から頭足人表現になり三歳位になると次第に自分の描きたいものを線でぐいぐい描けるようになる。猪熊弦一郎の「顔の習作」は、人の顔の表情を一瞬に捉え線で簡潔に描いている。その点が子どもの描く絵に類似していることが鑑賞作品としてはふさわしいものと考えた。

鑑賞方法としては、保育者が写真5の作品を子ども達に見せ、子ども達に次のように話しかけた。

「この絵は猪熊弦一郎さんが描いた絵だけど、みんなこの絵を見てどう思う？」

「変な顔」「おもしろい」「顔がいっぱい」

「この顔はどんなときの顔だと思う？」

「すましている時」「怒っている時」

「あれって思った時の顔」「うれしい時」

「じゃ、どうしてそのように感じるの？」

「口が笑っているから」

「目がにらんでいるから」

「じゃ、この絵のように笑ったり、怒ったりこの絵と同じ顔のまねをしようよ！」

この鑑賞活動の後、各自が好きな大きさや色の紙に顔やからだを描く造形活動を行った。

この活動のように、人物の特徴を線でとらえて描くような活動について、この時期多く体験させたい。できた一人ひとりの作品を繋げることで構成美の要素が加わり、作品の迫力と共に良さが際立つようになった。みんなで大きな作品を作り上げた感動と達成感が生まれた。



写真6 活動の様子

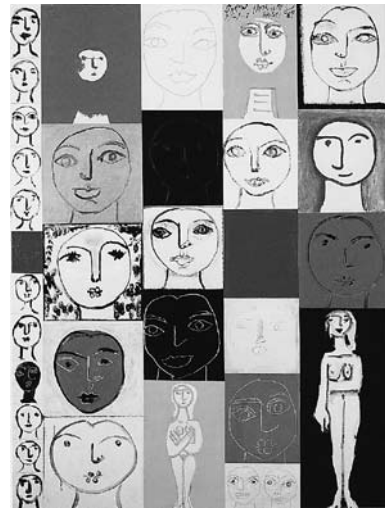


写真7 猪熊弦一郎作「顔の連作」



写真8 完成作品

過去の実践1・2のように、これまで小学校から高等学校で実践されていた制作に関わる鑑賞活動は、幼児の造形表現活動でも有効であることが明らかになった。

鑑賞作品を選択する場合、いろんなアーティストの作品を分析し、作品の造形要素のどの部分を子ども達の造形表現に結びつけることができるのか考慮することが大切である。そして、その造形要素の良さを気づかせるための保育者の発問の仕方、また、幅広い造形表現に対応するためさらなる研究の必要性を感じた。

Ⅲ 今年度研究開発した幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞の手立て

Ⅱで述べた幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞の手立ての基本的考えをベースに、今年度1～6の教材を開発した。

1 花を描くための鑑賞



写真9 アイズピリー作「花」

花を描くための鑑賞作品として、写真9のアイズピリー作「花」がふさわしいと考えた。

この作品は、明暗や遠近法を用いていないため子どもの表現に類似している。また、観察画ではなく、見た印象を線と色彩に簡潔に表現している。子ども達は観察画であっても大人のように見ながら描くのではなく、一瞬の印象を画面に描く。その点で子どもの表現に共通するところが多い。子どもにも、大胆なフォルムと色彩が調和したこの作品の美しさは感じ取ることができると思われる。

では、この作品を子ども達に見せながらどのような発問をし、気づかせたい造形要素を感じ取らせるのか述べたい。

「この絵を見てどのように感じますか？」

「色がきれい」「お花がお話ししてるみたい」

「この絵に描かれているものは何かな？」

「いろんな色の花」「花瓶」「テーブル」

「壁」

「この花の名前分かるかな？」

「チューリップ」「バラ」

「一番大きな花は何色かな？」

「きいろ」「しろ」「しろとピンク」

「花のかたちはみんな同じ形しているかな？」

「大きさも少しずつ違うし、形もちょっとずつ違うと思う」

「この絵を見ながら、今座っているところから花の形や茎を指でなぞってごらん。」

「あっ、ほんとうに花の形が少しずつ違うのが分かる」

「花瓶を見て何か感じる人はいるかな？」

「水が入っているから重そう」

「花瓶の模様がオセロゲームみたい」

「この花の絵の葉っぱはどこかわかるかな？」

「あっ葉っぱが青い！」

「葉っぱはみんな本当は何色だと思う。」

「緑っぽい色」

「そうだよ、でもアイズピリーさんは青っぽく見えたのかもしれないね。」

「みんなも自分が感じたままに色をつければいいんだよ！」

以上の鑑賞後、

「アイズピリーさんと同じような美しい絵を描いて欲しいので、お花を用意しました。」

「今日は、この花を太い筆と自分が使いたい色の絵の具で描きましょう！」

「お花や花瓶をじっと見て形を覚えたら、筆で素早く描くと画用紙の中に本当の花があるように素敵な絵になるよ！」

*違う色を使う時は、筆をしっかりと洗うよう指示する。

準備するもの

小さいボールにポスターカラーやアクリル系絵の具を描きやすい濃さに水と混ぜておく。(20色くらいの中から子どもに使う色を選ばせる。)

パレット 太筆 筆を洗うバケツ 布



写真10 4歳児の花の参考作品例

2 スタンプ版画のための鑑賞



写真11 ミロ作「人物と動物」

鑑賞作品として、写真11 ミロ作「人物と動物」を選んだ理由は、一つは子どものための展覧会でミロ作品は多く展示されることにある。それは、バルセロナにあるミロ美術館では教育普及に力を入れ子どものための鑑賞プログラムを多く開発し世界に発信しているためである。

また、ミロの作品の特徴は赤・黄・青・緑など原色が多く使われ、幼児が日々目にする色に近いからである。そして、作品の印象は楽しく明るい雰囲気、元気を与えてくれるものである。表現されている人物や動物は2～3歳児の特徴である頭足人に近く、子どもにとって親しみやすい点も鑑賞作品にふさわしい。

また、この作品はリトグラフという版画技法で描かれているため、スチレン版によるスタンプ版画と刷る過程が近いことと、できあがった雰囲気が似通っている点も選ぶ理由の一つである。

鑑賞方法としては、作品を見せながら次のような発問をしながら制作に結びつけたい。

「この絵は、ミロさんという絵描きさんが描いた作品です。」

「この絵を見てどのように感じますか？」

「おもしろい!」「子どもの絵みたい」「大きな虫見たいのがいて不思議」「うちの弟が描く絵みたいにぐるぐるしている」「犬が吠えてるみたい」

「みんなこの絵からいろいろ見つけたね!すごいよ!」

「この絵の中に何色があるか教えてくれる?」

「赤」「青」「黒」「黄いろ」「黄緑」

Aの図を示しながら

「色は違っても良いのでこれと同じまるい形はどこにあるかな?」

Bの図を示しながら

「色は違っても良いのでこれと同じ形はどこにあるかな?」

Cの図を示しながら

「色は違っても良いのでこれと同じ形はどこにあるかな?」

A



B



C



「今みんな同じ形をたくさん探してくれたけど色や大きさが変わっていても同じ形がたくさんあるよね!」

「今日はミロさんのような絵を描きたいんだ!」

「先生は、ミロさんのような絵を描く簡単な方法を知っています。」

「それはね、はんこを作っているところを押せばできるんだよ!」

「はんこは、はじめにこの白い板（スチレン版）に鉛筆で、さっき見せた丸とか星みたいな形などミロさんの絵の中にあるものを真似して描いて下さい。」

「いろんなかたちのはんこがあるとミロさんと同じように素敵な絵ができるよ!」

「形が描けたらかたちのまわりをはさみで丁寧に切って下さい。」

「切ったかたちを両面テープで台（断熱用の板を切ったもの）に貼って完成です。」

「はんこができたなら好きな色のスタンプ台を選んでインクを付け、紙に押して絵を描きましょう!」

この活動は、制作に結びつけるための鑑賞ではなく、ミロ作品の疑似体験することにより、

ミロ作品の良さに気づかせる鑑賞に重きを置いた活動と言える。

スチレン版によるスタンプ版画は、本来繰り返し模様を楽しむ活動に多く、構成力の基礎を育むのに適しています。今回提示した造形活動は、さらに子ども達の創造性を育むのに有効と考える。



写真11 スタンプ版画造形活動の様子

3 いろんな技法を活用した絵具遊びのための鑑賞

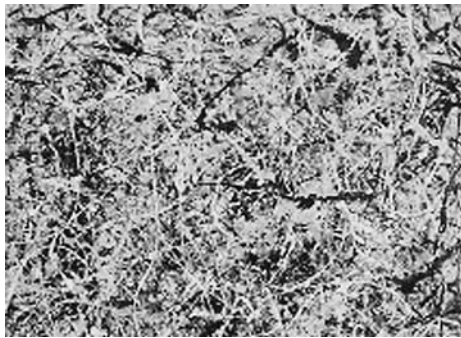


写真12 ジャクソン・ポロック作「No.1 (部分)」

鑑賞作品として、写真12 ジャクソン・ポロック作「No.1 (部分)」を選んだのは、ペンキに絵の具をつけて垂らすドリッピング技法という表現行為そのものは幼児でも真似ることができ、幼児の造形遊びとして活動する絵の具遊びに近いからである。ローラ遊びやフィンガーペインティングなども同じような色に対する感性を育む表現である。最初に完成のイメージがあって描くのではなく、描きながらイメージを拡充し創作していく過程が造形遊びと共通している点も鑑賞作品にふさわしいと考えた。

鑑賞の進め方は、はじめにこの絵を子ども達に見せながらつぎのように発問しながら鑑賞する。

「この絵は、ジャクソン・ポロックさんという人が描いた作品です。」

「この絵を見てみなさんはどのように感じますか？」

「なんか線がぐちゃぐちゃしている」

「線の迷路みたい」「なんか垂らしたみたい」

「絵に見えない」

「これはどのようにに描いたのかな？」

「わかんない」「前に筆から絵の具がたれた時こんなふうに床に色がついたよ」

「ピンポン正解です。ポロックさんは筆にペンキをつけて腕を思い切り振って描いたらしいよ！」

「今日は、先生が絵を大きく見るために虫眼鏡を持ってきました。皆さんは、これを使って近くで絵を見て下さい。」

「いろんな色の線が幾つも重なっている」

「絵の具がひびが入っている」

「近くで大きく見ると虹みたいに色がすごくきれい」

「みんな紙に絵の具を一杯垂らして、手のひらでぐちゃぐちゃ絵を描いたことあるよね！あの時みんな楽しかったかな！」

「すごく楽しかったけど、少し絵の具が服についてお母さんに怒られた」

「〇〇君と一諸に絵の具をぐちゃぐちゃしすぎてすごく汚い色になった」

「みんないろんなこと覚えているんだね。今日は、ポロックさんみたいな絵を描きたいと思っています。」

「ポロックさんみたいに筆で描くことはしません。ボールを使って転がして遊びます。」

「絵の具の入った洗面器に、自分が使いたいボールやビー玉、マジックボールを入れて絵の具をつけて画面の上に転がして遊びます。」

「どこからどんなふうに転がすとどんな線になるか考えながら遊ぶといいよ！」

準備するもの

大きいものでテニスボール、小さいもので
ビー玉くらいのいろんな大きさのボール

木枠 絵の具の入った洗面器

時々手を拭くキッチンタオル

ロール画用紙

子どもは、夢中になって遊ぶ。いろんな線や
点が表れてくると、少しずつボールの投げ方を
工夫しながら線の重なりを楽しむようになる。
ポロックの軌跡の美しさを子どもなりに体験で
きる活動と言える。



写真13 ボール遊びの様子

4 想像をもとにした絵を描くための鑑賞

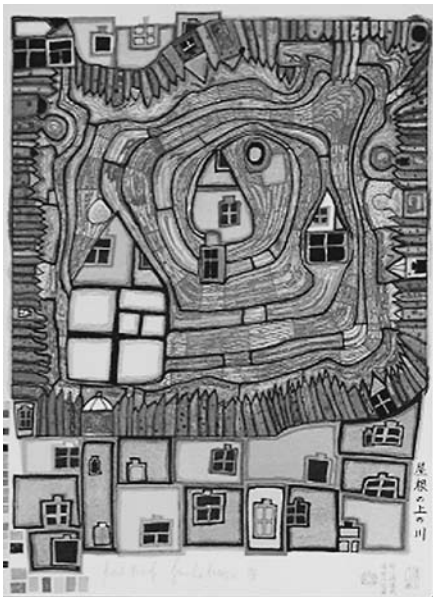


写真14 フンデルトヴァッサー作「川の終わり」

鑑賞作品として、写真14 フンデルトヴァッ
ッサー作「川の終わり」を選んだ理由は、遠近

法を使わず、幼児の絵の特徴である展開図描法
で描かれていることにある。家並みがぐるっと
まわりを囲み、中心に川と道が迷路のように配
置され、上から見たような表現方法は子どもに
理解しやすいと考えたからである。造形要素で
ある点・線・面がわかりやすい画面構成で表現
されていることも、鑑賞後の造形表現に結びつ
きやすく、また、世界中の子ども達は、家を描
く時は必ずと言って良いほど真ん中に窓を描く
が、そのことは、幼児の作品鑑賞に対する興味・
関心を誘発すると考えられるからである。

構成面では点線面のバランスも良く、色彩面
では有彩色と無彩色の調和が大変美しい。この
作品を鑑賞することにより子ども達の創造性を
刺激したり、デザインに関心をもつめばえが育
成できると思われる。

鑑賞の方法は、作品を見せながら次のような
発問をしながら鑑賞を深めていく。

「この絵は、フンデルトヴァッサーさんが描い
た「川の終わり」と言う題名の作品です。」

「川の終わりという題名ですが、どこに川があ
りますか？」

「正月お母さん達とやった双六みたいに青い
ぐるぐるしているところ」

「川以外に何が描いてあるかわかるかな？」

「お家」「窓」

「そうだね、お家と窓がたくさん描かれてる
ね！」

「こんな赤とか黄色がいっぱいの街を見たこと
あるかな？」

「デズニースーランドみたい」「デズニースー
シーにも
似ている」

「この絵のような街や家は どう思いますか？」

「楽しそう」「住んでみたい」「お家の中がど
なっているか覗いてみたい」

鑑賞活動後、「住んでみたいお家を描こう」
に展開する。

「絵を見ている時、お家の中がどなっているか
覗いてみたいと言っていた人いたよね。今日は
そんなみんながこんな家に住みたいなあと思う
絵を描いて遊びます。」

「今日は二人一組で絵を描きます。」

「画用紙を半分にして、右と左を二人で描きます。表は外から見たお家、裏は家の中をくれよんで描いて下さい。絵ができたら屋根の上ははさみで切ります。」

「絵が仕上がったら、みんなでいろいろなお家をたずねて遊びましょう」



写真15 「私の住みたいお家」制作風景

5. 美しい模様を描くための鑑賞

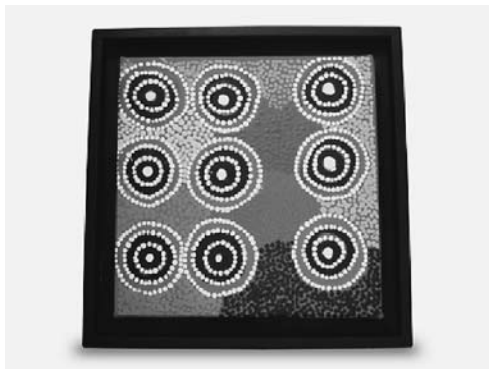


写真16 アボリジニのアート作品

鑑賞作品に写真16アボリジニのアート作品を選んだ理由は、民族アートとして伝統的に点描技法を駆使しながら現代アートに通じるモダンなデザイン性の強い工芸品となっているためである。幼児がこの作品に触れ、感覚的に色彩と構成の美しさに気づくと思われる。カラフルな下地の上に点で模様を描くことは、制作方法の工夫次第で幼児でも造形表現できるからである。点を繋げることで円になったり、波形になったり、直線になるなど表現の基礎を経験することで子どもの造形感覚を養うためである。

鑑賞の方法としては、アボリジニのアート作品を数点示し、その特徴を気づかせるため、「こ

の作品の描き方で似ているところはどこかな」と発問する。作品の構成要素を幼児なりに分析し、点を繋げることで模様を描いていることに気づくと思われる。

明るい色の点には、下地の色が濃い色、濃い色の点には、下地が明るい色となっていることにも気づかせたい。

鑑賞後の制作は、点で模様を描く下の写真17・18のような豆やパスタを並べて模様を楽しむなどの活動が考えられる。

準備するもの

板、木工用ボンド、豆類またはいろいろなかたちのパスタ

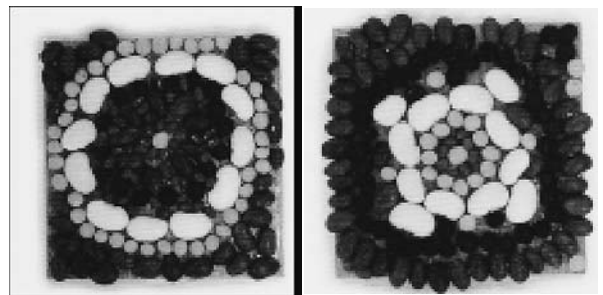


写真17 豆の構成Ⅰ

写真18 豆の構成Ⅱ

*活動参考作品例

6 粘土遊びのための鑑賞

鑑賞作品として、写真19の紀元前2500年頃インドで出土された「地母神」を選んだ理由は、このテラコッタで造られた像の表現方法が、子ども達が粘土で形を作る特徴に類似しているからである。子ども達は粘土で遊ぶ時、粘土を転がしながら球をつくったり、棒状のひもづくりを楽しむ。この像は、粘土の固まりと球、ひもづくりで制作されている。宇宙人のような顔は、球体を少しつぶして目となり、くちびるは球を少し長く伸ばして貼り付けている。人体のバランスから考え腕が大変長く表現されている。幼児の表現の特徴である全体のバランスを無視し、自分の印象深いところを誇張するように作られている。幼児は、素直にこの像のもつ素晴らしさに気づくことができると思われる。

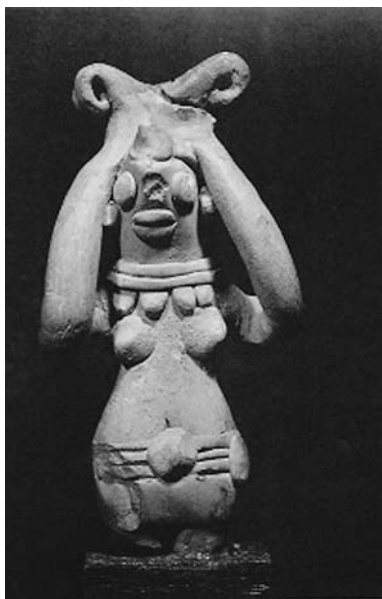


写真19 紀元前2,500年頃
インド出土「地母神」

鑑賞時の発問としては、

「これは何で作られていますか?」「粘土」
「これは粘土で作って焼いたテラコッタという
のだよ。」

「この像を見てどのように感じますか?」

「宇宙人みたい」「動物か人か区別がつかない」
「先生は人だと思うけど、女・男どちらだと思
う?」「おっぱいがあるから女だと思う」
「この人は何をしているところだろ?」
「髪の毛を洗っていると思う」

「どうしてそう思うの?」

「お母さんが頭を洗っている時、こんな感じ
だもん」

「髪の毛ごしごししている感じ出ているよね。」

鑑賞後、粘土遊びの制作に入る。

「今日は、今見た像のように何かをしている人
を粘土でつくる遊びをします。」

「サッカーしている人でも、ボールを蹴ってい
る人、キーパーでボールをとめてる人などいろ
いろいるよね。好きなかたちでいいですよ。」



写真20 粘土遊び作品参考例「なかよし」

Ⅳ まとめ

今年度の研究は、過去の実践から幼児の造形活動にどのような鑑賞作品を活用し、どのように鑑賞活動をしながら造形表現に展開したら良いのかを教材開発した。

アーティストの作品や民族芸術、原始美術など幼児の表現に類似し、子どもにインスピレーションを与えるものを鑑賞作品として選び出した。

幼児対象の鑑賞活動のため、できるだけ現場の保育者が活用しやすくなるよう考え、発問形式で鑑賞作品のもつ造形要素が読み取れるように工夫をした。予想される子ども達の発言も記したが、決して誘導的に発言を求めている訳ではない。自由なやりとりの中で、子どもが主体的に気づくことが望ましい。

今年度の研究は、幼児が自ら主体的に造形表現活動ができるよう鑑賞活動から表現に結びつける一連の流れを教材開発したが、実際にここで示した鑑賞活動から造形表現に展開する手立てについて、検証を行っていない。今後保育現場で実践し検証したいと考えている。有効であることが検証できれば、保育現場での造形表現活動の多様性に対応できるように鑑賞教材と関連づけた造形活動をより多く開発していきたいと考えている。

参考文献

- ・「大学造形美術教育研究6号」全国大学美術造形教育教員養成協議会2008年発行
- ・「人間生活学研究1号」新潟人間生活学会2010年発行
- ・「驚くべき学びの世界 レッジョエミリアの幼児

教育」佐藤学監修

ワタリウム美術館2013年発行

・遊びの創造共育法6「色面の遊びと造形」

和久洋三著 玉川出版2006年発行

・「子どものためのアートブック」その二

ファイドン株式会社2006年発行

・幼児の造形ワークショップ3基本と展開編

東山明監修 明治図書 2004年発行

*下記の図書から転写した写真

・写真1

現代世界美術全集10「ルドン／ルソー」

集英社 1971年発行

・写真5・7

「いのくまさん」丸亀市猪熊弦一郎美術館監 修

小学館2006年発行

・写真9

「アイズビリーカレンダー」

紀伊國屋書店2010年度版

・写真10

遊びの創造共育法1「子どもはみんなアーティスト」

和久洋三著 玉川出版2006年発行

・写真11

「ミロ版画1933-1963」図録

山梨県立美術館1996年発行

・写真12

「子どものためのアートブック」

ファイドン株式会社2006年発行

・写真14

「フンデルトヴァッサー全版画作品集」

岩波書店1988年発行

・写真16

Uluru art galleryのホームページ

アボリジニアートより

・写真17・18

遊びの創造共育法7「点線面の遊びと造形」

和久洋三著 玉川出版2006年発行

・写真19

岩波美術館 歴史館第1室「かたちの誕生」

高階秀爾著 岩波書店1987年発行

・写真20

「ずがこうさく」1・2上

日本文教出版2010年発行